



いじめと想像力

副校長 杉山貞文

「死ね」「消えろ」といった言葉に私は憤りを感じるのと同時に、大変寂しい気持ちになります。大人であろうと子どもであろうと絶対に使ってはいけないこの言葉は、身近なところで安易に使われ、それが当たり前のような社会になりつつあるのではと思うと、残念でならないのです。この言葉で言われたことが本当に起こってしまったら…。言った側は「そんなに深い意味はなかった。」「軽い気持ちで言っちゃった。」「ちょっとふざけて。」などと言うでしょう。

暴力を伴ういじめは顕在化しやすく、いじめを行った側も罪悪感をもつことが容易に考えられます。しかし、無視・仲間はずれ・悪口・陰口・冷やかし・からかい・金銭強要など、暴力を伴わないいじめは、遊びの延長との境界線が不明瞭であり、それを行った子どもも罪悪感をもちにくい傾向があります。また、物を隠す・暴言を書いた落書き・SNSへの匿名の書き込みなど、やられた側にとって「誰が自分に対して行っているのかわからない」といった陰湿なものも多くあります。しかし、これらは間違いなくいじめです。絶対に許されるものではありません。

「いじめられる側にも問題がある」「いじめる側にも理由がある」といった理屈を聞くことができますが、いじめをやっていい理由なんてあるのでしょうか。いじめをされた側が受ける辛さや悲しさを想像すれば、やっていいことかどうかわかるはずなのに、逆に、やっていい理由を考えて実行してしまっている。これでは、いじめがなくなるどころか、増えていってしまう未来が容易に浮かんできます。

子どもたちは、その年齢や発達段階に応じて、たくさんの指導をされてきています。それは学校だけではなく、ご家庭や社会の中でも教わってきていることと思います。そこで学んだモラルや教えを守るという形でいじめを行わないことも大切ですが、**もっとも大切なことは、「自分自身の想像力を働かせて、いじめをしないという行為を選択していくこと」**なのではないかと思えます。何かトラブルが起こり相手に怒りを感じていたとしても、嫌なことが続いてむしゃくしゃしていたとしても、そのいじめを行うことで「相手がどんな気持ちになるのか」「相手その後どんな毎日を過ごしていくのか」「自分がどんな人間になっていくのか」を、想像力を最大限に働かせて考え、正しい選択をしていってほしいと思えます。

学校では、いじめと思われることが起きた場合、すぐに情報を共有しチームで対応します。いかなる場合も「被害を受けた子を守る」ということを貫きます。素早く対応し、再発防止策を徹底していくことを大切にしています。また、「いじめのない学校づくり」で終わりではなく、その先を目指しています。

「互いの人権を尊重し、心豊かな児童を育成すること」です。そのためには、「自己有用感」が重要であると考えます。認められているという実感をもった子であれば、いたずらにいじめの加害に向かうことはないと思います。しかし、誰でもどの子どもも被害者になることはあり得るし、加害者になることもあり得ます。傍観者になる可能性もあります。その時は、学校とご家庭とが同じ方向を向いて、よりよい子どもの成長につなげる指導をしていきましょう。

いじめ根絶、そしてその先の人間形成を目指し、よりよい教育をこれからもすすめていきます。今月もよろしくお願いいたします。

☆今月の上寺尾短歌☆

心情は 目に見えないから わからない だからしっかり 想像しよう
いじめるか いじめないかを 決めるのは 他の子じゃない 自分自身だ